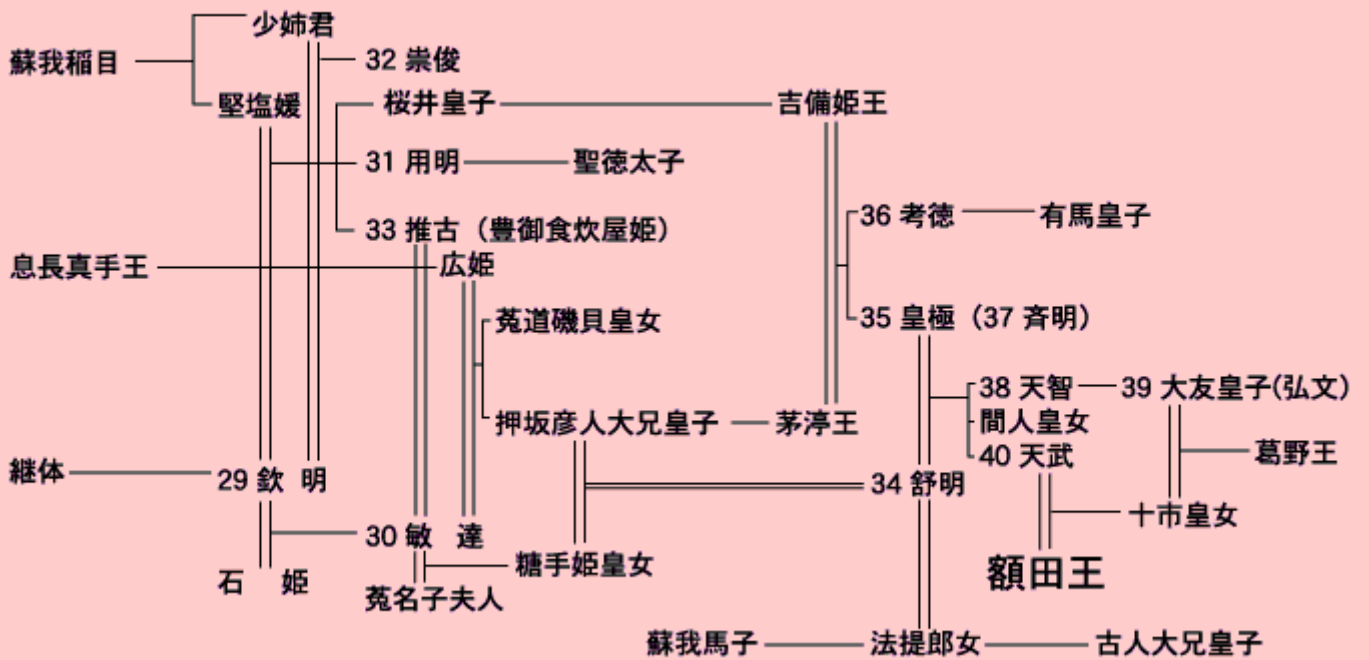


『万葉集』 熟田津の歌

額田王の伝えは、主に万葉集が中心で、日本書紀に少し出てくるぐらいです。そこでは、天武天皇の妻だったことぐらいしか触れていません。額田王について考える場合には、万葉集に出てくる歌の問題、あるいは歌に出てくる額田王像の形でしか、私たちは膨らませられず、人物像のところまで行きつくことができません。

額田王略系図



(皇子女の配列は誕生順ではない)

額田王が歌

にきたつふなの
熟田津に船 乗りせむと月待てば 潮 もかなひぬ今は漕ぎ出で

な (『万葉集』巻1・8)

右は、山上憶良大夫が類聚歌林を検すに、曰はく、「飛鳥の岡本の宮に

天の下知らしめす天皇の元年 己 丑 の、九年 丁 酉 の十二月

つちのとみ つきたち みづのえうま おほきさき いよ
己 巳 の 朔 の 壬 午 に、天皇・大 后、伊予の

湯の宮に いでま のち
幸 す。後 の岡本の宮に天の下知らしめす天皇の七年

かのととり ひのととり つきたち みづのえとら
辛 酉 の春の正月 丁 酉 の 朔 の 壬 寅 に、御船

西つかたに ゆ うみぢ つ かのえいぬ
征き、始めて海 道に就く。庚 戌 に、御船伊予の熟田

いはゆ かりみや は むかし のこ
津の石 湯の 行 宮に泊つ。天皇、昔 日のなほし 存れる物を

みそこなは ころ
御 覧して、その時にたちまちに感愛の 情 を起こしたまふ。この

ゆゑ みうた つく かな
故によりて歌 詠を 製りて哀傷しびたまふ」といふ。すなはち、こ

の歌は天皇の御製なり。ただし、額 田 王 が歌は別に四首あり。

この歌は国際関係とは関係がないようにみえます。しかし、国際関係の問題を日本書紀から考えたときに、この歌の背景にある問題がかなり見えてくるように思います。いくつか異なることが書かれている中で、つぎの部分が目をひきます。

「天皇の七年辛酉の春の正月丁酉の朔の壬寅に」

天皇の七年とは斉明七年（661年）、七世紀中ごろ、額田王が生きていた時代です。そのとき

「御船西つかたに征き、始めて海道に就く。庚戌に、御船伊予の熟田津の石湯の行宮に泊つ。」

この部分には、御船（天皇の船）が西に向かって行き、始めて海に出て、伊予の熟田津の石湯の行宮に泊まったとあります。そのときの歌が「熟田津に船乗り

せむ」

という歌

です。熟田

津とは、伊



予の道後温泉の海岸辺りと推定されます。この辺りに天皇の船が停泊した時に、これを詠んだと思われます。「熟田津に船乗りせむ」とは、これから出港して行くところです。「船乗りせむ」は昔のことではなく、これからまさに始めようとするを言っています。

「月待てば」・・・ 船出をするときに月を待つことは、わかりづらい話ですが、続く文脈の「潮もかなひぬ」と言われている潮の満干が月齢と密接

な関係を持っていますから、「月を待つ」とは船出に最も都合の良い潮を待っているという意味らしいのです。もうひとつは明るい方が航海しやすいからという理由もあるかも知れません。

この歌は、船出を月とともに待っていて、月もかなった、潮もかなった、そこで出港しようという歌らしいです。潮と船出とが関わるのは私たちの感覚だと大分ずれているのですが、当時の港は、機械で掘って造ったものではなく、停泊しやすく、船を乗り上げやすい砂地で少し遠浅の所へ満潮の時に入港します。潮が引いた時にそのまま流されないように残します。そこで乗り降りする。それが一番簡単な港の作り方、船の乗り降りの仕方です。その状態で次に準備が整ったら浮くのを待ちます。それが多分この歌だろうと推定されます。

そこで日本書紀からの引用です。

『日本書紀』 齊明七年（661年）

はるむつき ひのとのとり ついたちみづのえとらのひ
「七年の春正月の丁酉の朔壬寅に、
みふね ゆ はじ うみつみち つ きのえたつのひ
御船西に征きて、始めて海路に就く。甲辰に、
おほくのうみ いた おほたのひめみこ ひめみこ う
御船、大伯海に至る。時に、大田姫皇子、女を産
む。仍りて是のひめみこ なづ おほくのひめみこ い
か。えいぬのひ いよ にきたつ いはゆのかりみや は
庚戌に、御船、伊豫の熟田津の石湯行宮に泊つ。
熟田津、これにきたつをば備积柁豆といふ。」

661 年は、万葉集の 8 番の歌の年と同じです。

「七年の春の正月の 6 日に～御船西に征きて、始めて海路に就く。」先程の額田王の中にでてくるのと同じ文です。「庚戌に、御船、伊豫の熟田津の石湯行宮に泊つ。」ここも一致します。一致するのは万葉集を編んだ人が、これを見て書いているからです。